2014年12月20日 第512号（隔月発行）

アジアの友

The Asia-no Tomo

12-1
DECEMBER-JANUARY
2014-2015

新春インタビュー

ラオスで理想の教育　夢の一歩前進

チャンタソン・インタヴォンさん

第13回 2014 ABK 秋祭りを開催

アジア文化会館では 10 月 25 日（土）、13 回目を迎えた「ABK 秋祭り」を開催しました。当日は地域にお住まいのみなさまをはじめ大勢の方にご来場いただき、留学生たちが腕を振るった各国料理を楽しんでいただきました。また、ステージ上では学生たちによる民族舞踊や日本人人気ミュージシャンによる歌などが披露され、大いに盛り上がりました。

2014 焼き肉忘年会を開催

12 月 12 日（金）、ABK 地下ホールにて毎年恒例の焼き肉忘年会が開催されました。参加したおよそ 200 名の学生たちは、大量に用意された美味しいお肉に舌鼓を打ち、2014 年暮れの一夜を楽しみました。

アジアの友

2014 年 12 ー 2015 年 1 月号 第512号

目　次

2
2015 年 新春のご挨拶
アジア学生文化協会理事長　小木曽友

新春インタビュー
4
ラオスで理想の教育　夢の一歩前進
チャンタソン・インタヴォンさん　～ラオス

ご報告
14
日本百賢アジア研究院 創立記念レセプションが開催される

15
ＡＢＫ関係者 三氏が旭日章を受章
ご祝辞「希望のあるところに種を蒔く」 小木曽友

留学生キッチン
20
② 生春巻き　（ベトナム）　グエン テゥー ガン

私の意見私の体験
23
「橋を渡ったところにあったもの」 周 媛　～中国

コラム
26
泰日工業大学 奮闘記（第９回）
「卒業式の先にあるものは…」 水谷光一

28
知友会通信
奨学金・イベント情報

MEMBERS
32
ご入会、ご寄付のご報告（2014 年 10 月、11 月）

＜表紙＞　ラオス カム族の子供たち　Photo by bonga1965

2015年 新

謹んで新春のご挨拶を申し上げます。

昨年は、弊協会の公益財団法人への移行、及びそれに先だって分離独立した学校法人ABK学館日本語学校の開校を無事実現することが出来ました。これもひとえに内外関係者の皆様の物心両面にわたるご支援の賜物と深く感謝申し上げます。本年は、50有余年の風雪に耐えてきたABKが、この両法人を車の両輪として相互に補完しながら、また次の50年に向けて力強く前進してゆきたいと考えております。

来年（2015年）度の重点目標は次の通りです。

１．日本語教育の充実：ABK日本語コース、ABK学館日本語学校のそれぞれの特徴を生かした教育の充実、及び海外連絡事務所との緊密な連携の下に、両校合わせて380名の定員を満たす入学者の確保。

２．宿舎の充実：日本語学校生が安心・安全・快適に生活できる宿舎、及び大学・大学院生・日本人学生・職員の共同生活・相互交流による人間修業の場―塾としての宿舎の充実。併せて、老朽化の進む新星学寮の建替計画の検討。

３．国際教育支援事業の充実：外国人向け日本留学情報サイト（JPSS）及び外国人留学生受入れ促進のためのABKアドミッション総合サポー

春のご挨拶

アジア学生文化協会 理事長
小木曽 友

ト事業の一層の発展。日本人へのアジア語、アジア理解普及事業の促進。

４．関連団体との連携・協力：ABK留学生友の会、アジア文化会館同窓会、日・タイ経済協力協会、泰日経済技術振興協会（TPA)、泰日工業大学（TNI)、ベトナム・ドンズー日本語学校・ベトナム子供基金および昨年新たに設立された日本百賢アジア研究院（BXAI、事務所はABK内）との連携・協力。

５．広報活動の活性化：隔月誌『アジアの友』では、留学生問題に止まらず、元日本留学生たちの母国での活躍、特に教育の充実、生活・社会・産業のイノベーションをめざして活躍する人々の実像を紹介するなど、魅力ある誌面作りに努めたい。

６．会費・寄付金の倍増計画：昨年４月より会費・寄付に対して税金の控除のある公益財団法人の認可を得ましたので、協会活動を支える重要な財源として改めてご寄付のお願いを申しあげたく存じます。

ここに、内外関係者の皆様の一層のご支援・ご鞭撻を切にお願い申し上げ、併せてご健勝・ご活躍をお祈り申し上げます。

新春インタビュー

Chanthasone Inthavong

ラオスで理想の教育　夢の一歩前進

チャンタソン・インタヴォンさん　　～ラオス

「特定非営利活動法人ラオスのこども」やヴィエンチャンの「ホアイホン職業訓練センター」の代表を務めるチャンタソンさんは、1974 年日本政府の国費留学生として来日。1982 年に「ASPB ラオスの子どもに絵本を送る会」を設立して以来、ラオスの子どもたちの教育のために心血を注いでいる。

「絵本を送る会」は現在「ラオスのこども」に改名し、日本の絵本をラオスで翻訳出版するだけでなく、現地の作家を育て、ラオスでオリジナルの絵本を出版している。また各学校に図書室を開設し、教員の図書教育を充実させるなど、子どもたちが本に接し学ぶ機会を増やす活動を展開している。

また、チャンタソンさんは 1998 年に JICA の援助を得て「ホアイホン職業訓練センター」をヴィエンチャンのホアイホン村に設立。貧しい女性たちを対象に染色、織り、縫製技術の訓練を行い、彼女たちの自立を支援している。

また今年（2014 年）は念願の保育園と小学校の校舎が完成し、来年の開校に向け準備中とのこと。さらに、中高、専門学校の設立に向けた計画を立てている。

ラオスのためにエネルギッシュに活動するチャンタソンさんに、お話しをうかがった。

野口 チャンタソン インタヴォン
1953 年ラオス・ヴィエンチャン市生まれ。1981 年お茶の水女子大学大学院人文科学研究科卒業（教育学）。1982 年「ラオスのこども」設立、共同代表。1986 年東京都立大学大学院人文科学研究博士課程修了。1991 年～ラオスの女性とともに仕事をつくる会設立、代表。1977 年～ 1978 年ＡＢＫ在館。

子どもたちに本を届け続ける「ラオスのこども」

――「ラオスのこども」の活動について教えていただけますか。

「ラオスのこども」の主な事業は、子どもたちに本に接してもらうための図書活動、本の出版、学校の先生の研修です。研修は図書司書の役割など図書に関すること全般についてやラオスには少ない情操教育、つまり図工や音楽などを教えることができる先生を養成しています。

また「子ども文化センター」という子どもたちの学び・遊びの場を各地に作り、そこを拠点に様々な研修を行っています。具体的には学校の図書室設置を支援していますが、図書室のオープニング前に各学校の先生たちを集めて図書を有効活用するための研修を行うなどです。

私たちは、今では教員養成学校でも図書の役割に関する講演や研修を行ってきましたが、それが教員養成学校の正式なカリキュラムに導入されるまでになっています。

こうした図書活動を行っている団体は他にもありますが、「ラオスのこども」の特徴はラオス語のオリジナルの本を作っているということで、ラオス人の作家を育て、現地で絵本を出版していることです。

――いつからこのような図書活動をするようになったのでしょうか。

「特定非営利活動法人ラオスのこども」の前身となる「ラオスに絵本を送る会」は、絵本を送る活動で、アジアが好きな人４～５人で1982年に設立しました。しかし、その前に、来日してから初めて1979年に一時帰国する機会ができラオスに戻った時、建築学校で学ぶ弟に、建築家の夫の古い本を持って行ったのがきっかけでした。

ラオスでは日本と違い、貧しくて学校をやめると本と全く縁がなくなってしまうので、文字を忘れてしまうんです。しかし身近に本があれば文字を読む機会を持つことが出来ると思い、それで日本の絵本を送る活動を始めたのです。しかし、全部の文字を翻訳することは難しいので、最初はまず子どもたちに本に興味を持ってもらおうと、文字の少ないものを集めて送っていました。

ところが子どもたちは本を見て「これなんて書いてあるの？」と文字に興味を持つんですね。それでやはり全部翻訳しないといけないねということになって、ボランティアや同様の活動をしている他のNGOなどと一緒にラオス語への翻訳作業を始めたわけです。時々「これはちょっと違うのでは？」と思う翻訳もありますが、日本語のままよりもラオス語になっているということで、先生も読み聞かせができますし、子どもたちも喜んでくれています。

今も日本のベストセラーをいっぱい送っていますが、とにかく良い本を子どもたちに見せたいという思いでこれまでやってきました。

――当初のご苦労などはありましたか。

当初、活動は事務所がなくて、いつも紙袋に書類を入れてあちこちの喫茶店で作業をするという状況が続きましたが、料理教

室を開いている方が土日は使わないからとダイニングを事務所として提供してくれたり、会社の社長さんがパーティー会場を提供してくれたり、いろんな方のご好意で活動は成り立っていました。

本集めも、新聞に小さい記事ですが載せていただいて紹介してもらうなどといったことが昔はけっこうあり、中にはこれはラオスには送れない、というものもありましたが、とにかく様々な本が集まりました。

こうして長く活動をしていると「何十年も同じことをよくやっているね」と言われることがあるんです。でもこれは教育です。教育は今日やって明日すぐ成果が出るものではありませんから、続けなければ意味がないんです。

ところがスポンサーとしては新しいプロジェクトにお金を出したい。日本人は一つの活動を長期間支援するのは好まない人が多いですね。ですから、いつまでも子どもの図書室の支援ではなくて、もっと貧しい子どもの支援はないのかとなる。

でもそうではなく、貧しいのはラオスの教育であって、そこは貧乏人も金持ちもみんないっしょです。ですから息の長い仕事として理解して欲しいと言っているのですが、なかなか理解していただくのは難しいですね。私たちがしているのは教育環境の整備ですから、「緊急な援助ではない」、「命に関わっていない」ということで、説得するのに一苦労です。（笑）

友人に誘われての日本国費留学生試験が人生を変えることに

――― 日本に来られたきっかけを教えてください。

私は高校を卒業後、教員になりたくて当時ヴィエンチャンにある唯一の教員養成大学だったドンドーク大学（＝現ラオス国立大学）に入学したのですが、数日しか通いませんでした。大学に行って見たら、田舎からたくさん人が来ていて寮は足の踏み場もない。私も寮に入らないと通えなかったので、これはちょっと難しいかなと思ったんですね。諦める時は早いんです（笑）。

その時友人からたまたま「日本の奨学金があるから一緒に受けて見ないか？」と誘われて、受けてみたら友人は落ちて私が受かってしまった。ただ当時の日本政府奨学生は文科系のみ、しかも日本語学科にしか入れないというものでした。私は国に役立ちたいと思っていて教育に関することを学びたかったので、タイの先輩に相談したら、彼がYWCA母親の会の荻田さん（後に、ABK留学生相談室）を紹介してくれました。荻田さんは「それなら文部大臣（永井道雄：当時）に手紙を出して訴えてみなさい」と言われたので、他の留学生と一緒に駄目元で出してみたら、すぐに許可がおりたんです。永井文部大臣は、ご自身も留学経験がある方でしたから、私たちの気持ちを理解してくれたんですね。それ以降の留学生はみな自分で専門を選べるようになりました。

――― お茶の水女子大学で教育行政を学ばれたんですね。

ホアイホン職業訓練センターの建物と縫製研修の様子（設計は夫の野口氏による）

専攻の変更が可能になったのは良かったのですが、今度は大学を探すのが大変でした。国費生もそれぞれやりたいことは異なるので日本語学校の先生は大学探しではかなりご苦労されたと思います。私自身は教育行政をやりたかったので、それが学べるところはどこだろうと探してみると、当時はお茶の水女子大と奈良女子大にしかなかったので、それなら東京に残りたいのでお茶大にしようということになったんです。

当時私は、将来ラオスの文部省に入って教育行政をやりたいと思っていました。ラオスの教育のシステムがうまくいっていないのを見ていましたから、何とかそれを良くしたいと思っていて、そのために日本で勉強したんですが、大学4年生の時に日本人と結婚してしまったものですから、すぐに帰国できなくなってしまった。それで何をしようかと考え、ラオスはたくさんの少数民族で構成されているので、少数民族のアイデンティティ、ナショナリズムといった民族性の意識に関する勉強を大学院ですることにしたんです。

大学院は、「少数民族の教育によるアイデンティティの形成」というテーマで勉強したくて、在日韓国人の教育について研究をしていた東京都立大（現首都大学東京）の小沢有作先生のところに行きました。そしてそこでの勉強が、私の中学生頃からの夢である学校を作るという意欲を再燃させてくれました。その夢を追い求め、1992年にヴィエンチャン郊外に学校用の土地を2.5ヘクタール（1ヘクタール＝1万㎡）入手し、夢の実現の土台作りの一歩を踏み出しました。

職業訓練センターで貧しい女性の自立を支援する

――「ラオスのこども」の活動以外にもチャンタソンさんは様々なプロジェクトを興していますが、そのうちの一つである職業訓練センターについて教えてください。

職業訓練センターは縫製と染織、織りを教えるところで、日本人の友人達とラオスの布や民芸品を販売して得た建設資金で、学校を作る予定の土地の一角に1998年、事

務所棟、多目的研修棟、縫製棟、寮等を建設しました。これは貧しい女性たちのためのセンターで、その後、JICAの補助金を3年間受け、織りの研修棟、製品の展示室、生産棟をつくり各地の農村からの女性達の研修をスタートさせました。現在では各村に入って活動しているNGOなどの組織が、村の女性たちの自立を助けたいからと、研修を依頼してくるケースが多いです。これまでに300人以上の人がここで研修を受けました。

訓練期間は3か月と短いのですが、先生が器用に教えるので、みなびっくりするほど上手になります。そして一人前になると、村に帰って仕事を頼まれるんですね。工場に行かなくても家にいながら仕事ができるわけです。ちょっとでも形のあるもの、ラオスの民族衣装のシン、ブラウス、ズボンを縫えればミシン一台で自立できるんです。

教えているのは「ホアイホン職業訓練センター」のスタッフですが、彼女たちも、日本の先生に教わって今の技術を習得しました。そして研修がない時は、展示や販売用の衣類を縫ったり、織ったりしています。

――― 訓練センターの資金はそこで製作されるもので賄われているのでしょうか。

そうです。私が現地で商品を買い取り、日本でそれを売りその収益でまかなっています。まず「ラオスのこども」に売り上げの4割を、残りは訓練センターの運営費の一部にし、その他にも、センターでの製品販売や国内外の観光客や住民の方々の染織の体験で得られた費用等で、40名近くのスタッフの給料を支払ってますので、まだまだ厳しい状況が続いています。今でも足りない月の不足分は、私が補填しています。

1997年に日本の横浜のシルク博物館で大きな展示会をやったのですが、その時は600万円ほどの利益が出ました。そのお金で研修センターの建物3棟を造ったんです。そしてODA（JICA）で4つの織り物工房の棟、織り物の研修棟、多目的棟と研修生やスタッフが30名ぐらい泊まれる寮を作りましたから、今の施設は、倉庫兼染織の小屋も含めて8つの建物があります。

センターにはすでにフランス、アメリカ、日本等から来て1年間染織を勉強している外国人もいますが、将来的にはもっとたくさんの外国人やラオス人がラオスの織物の勉強に来られるようなところにしたいと思っています。

幼稚園と小学校を設立し理想の教育を実現する

――― さらに今年（2014年）、保育園と小学校を設立され、さらには中高校や専門学校の開設も予定されているとうかがっていますが。

幼稚園は来年（2015年）の1月に開校予定で徐々に募集を開始していこうというところです。小学校はまだ認可待ちなのですが、こちらも再来年スタートの予定です。建物は一つで、1階は幼稚園、2階は小学校、そして夜は語学学校になっています。また中高校、専門学校の予定地もその向かいに

幼稚園内。モダンで美しい作りになっている（設計は夫の野口氏）

用意してあるんです。人数は幼稚園、小学校とも多くて一クラスに25人。成果が出なければ意味がありませんからまずは少人数で始める。儲けるためではなくて、成果を出してモデル校を作りたいと思っています。

近年ラオスも急速に変っていて、都市の子どもたちは知識偏重の教育を受けさせられており、弱くて体力がない。日本の子と全く一緒でゲームばかりしています。みな同じ方向に向かっていて、拝金主義でお金があれば幸せということですね。ラオスの親は金持ちほど共働きで、子どもの世話はお手伝いさんがしています。親は夜になるとパーティーでほとんど子どもの面倒は見られない。お金があれば不自由はさせないからいいだろうという考え方がまかり通っています。その結果、日本と一緒で脱法ハーブや麻薬などの問題が子どもたちの間で蔓延し出しており、バラバラになってしまう家族もいます。

だから私はこれまでとは違う教育をやりたいと思っています。子どもに愛情を持って接し、自然の近くでいろいろな体験をさせたいと思っているんです。

もっとも「誰がお金を払って子どもに田んぼをさせるの？」と嫌みっぽく言われることがあって、要するにどこの国でも親は子どもに苦労をさせたくないんですね。

小学校・夜間語学教室

――― 幼稚園・小学校はご自身の資金で建てられたのでしょうか。

1992年に土地を買いましたから、そこから学校の設立まで22年かかりました（笑）。

土地の購入は、私だけでは困難でしたので父にもかなり手伝ってもらいました。夫は将来離婚するかも知れないと言って、前慰謝料として土地を買っておいてくれたため、それを売って学校用の土地を買い増ししました。

実は私の活動に賛同して「うちの土地を使ってくれてもいいよ」と言う地主もいるのですが、人の土地に作ったらいつか返さないといけません。始めてみてちょっと軌道に乗った時に返してくださいと言われたら返さないといけない。だから、やるのなら自分の土地でやろうと思い、まず土地を買っておいたのですが、建物を造るための資金が全然集まらなくて、結局これだけの時間がかかってしまいました。

私の趣旨に賛同していただいている知人から保育園・幼稚園・小学校の建設資金と運営資金の一部を寄付していただき、又大金を貸して頂いたおかげで、自身で細々と働いて稼いだお金と合わせて、4-5年前から夫が無料で設計してくれた学校の校舎を作り始めて、やっとこの10月にほぼ完成しましたが、設備はこれからです。

――― 校舎はどのくらいの規模ですか。

1階の幼稚園には1歳～5歳用の5教室と先生の部屋、2階の小学校には5教室と図書室、それぞれの階に100人くらい入るホールがあります。上下合わせて1,000平方メートルぐらいです。

――― 学費はどのようになるのでしょう。

今、ラオスには月500－600ドルする私立の幼稚園や小学校があります。日本より高いんです。私の幼稚園は、決して安くはありませんが150ドルくらいにしようと思っています。その金額ではうちのスタッフは子どもを入れたくても入れられないんですが、それより安いと、ラオスの公立学校のように一つの教室で40人の子どもの面倒を見なければならなくなってしまいます。それでは意味がありません。ちゃんとした教育をしたいから、少人数でやってみたい。

そしてこの学校が将来ラオスのモデル校になったらいいなと思っています。知識だけ詰め込むのではなくて、いろんな体験をしてもらい、いろんなことを身に付けてもらいたいと思っています。

――― 中高校の設立も計画されているとのことですが、これは幼稚園や小学校とは設立趣旨が異なるのでしょうか。

なぜ私が中学校以上をやりたいのかというと、「ラオスのこども」の活動の中ではなかなか解決できない問題があるからです。どういう問題かというと、少数民族の人たちの問題です。彼らは今、どんどんラオス人として同化しています。自分の民族のアイデンティティがどんどんなくなっていく。ラオスには少数民族学校が各県にあるので、少数民族の特に優秀な子どもを集めて、普通教育を行っていますが、そこで学んだ後、自分の村には戻りません。政府も政策的に少数民族を同化させたいと考えており、少数民族の価値、彼らの存在が国にどんなメリットをもたらすかということを全然理解していない。少数民族がそれぞれの民族性を大切にすることでラオスがどんなに魅力的な国になっているのかということを政府も少数民族の人自身も理解していないんです。

ですから少数民族のアイデンティティを大切にしながら、自分の民族をどうやって発展させるか、どうやって守るかといったことを自分たちで考えさせないと、外部の人、私もラオス人だけど少数民族ではないので外部の人間になりますが、そういう人たちがいくらアドバイスをしても、変わらないでしょう。やはり自分の中からその価値を認めて守る人を育てないといけないと思っているからです。

今の政府のように優秀な人だけ育てたら、彼らはどんどん街に来て村がすたれてしまう。そうではなくて、一つの村や民族から何人かを連れてきて、教育して、教育しながら彼等の民族のいいところを引き出させる。彼らの言葉も文化も守る。そしてその他にいろんな知識を与える。農村開発とはどういうものか、化学肥料を使わない農業とはどういうものか・・・、そういった価値観を理解させて、村に帰って自分の村を活性化させてもらう。

今、少数民族の村々にいっても、民族衣装を着ている人を見ることが出来なくなっている。少数民族の教育をもっともっと早く始めないといけなかったんです。だから今私はすごく焦っています。

――― 少数民族それぞれの文化や伝統があることが、ラオスの魅力となっているわけですね。

そうです。ところが、彼らの生活はどんどん浸食され荒らされています。例えばゴムのプランテーション等の開発で北部の少数民族は居場所がなくなってきています。60年から100年以上耕してきた彼らの畑にゴムの木を植えられている。

政府は彼らがそこにいるということを無視して何百何千ヘクタールの植林を許可してしまう。だから追いやられて違うところに行くしかない。政府の言い分としてはプランテーションが入れば発展もできるし少数民族に仕事を与えることが出来る。そこで除草をしたりゴム園の労働者として働いたりすればいいと言うのですが、労働者の日給は低くて家族を養うことはできません。彼らは今まで畑をしながら周りにある森から自然に生えているキノコや木の芽などを採集して、生活してきたので飢餓もなく食

職業訓練センターの製品の展示即売会（東京）

べてこられた。でも労働者として生活をしたら食べられなくなってしまう。豊かになるどころかもっと貧困になってしまうんです。そういうことはみなわかっているけど誰も言えないんです。

特に少数民族の多くは文字の読み書きができませんし、ラオス語も話せないから、自分の田畑を登録するという情報も知りません。何十年も同じ土地を耕していますから正式に登録すれば自分のものになるのですが、登録していないために大きなプロジェクトが来ると追い出されてしまう。保証金も全然もらえない。それに文句を言えば非国民と言われてしまう。だから文字を知らないでいいわけがないんです。

――― 教育を受けていないばかりに自分の権利を主張することができないということですね。

そうです。しかし、教育は国民に平等に必要なものですが、特に少数民族は、生活に役立たない教育は親が受けさせません。今の学校教育は生活に役立たないから行かなくていいよと言う。

国も学校教育については一生懸命やっていますが、地方に行くと少数民族はバラバラに住んでいて、一つの村から一つの村まで何キロも歩かなくてはならない。そこで分校を作るんですが、低学年までですから、３年生になるともっと遠い村に行かなければならなくなる。結局女の子なら行かなくていいよとなってしまう。

男の子の場合、校舎の近くに小屋を建てて、村の子ども何人かを一緒にして自炊生活をさせている親もいます。私はその生活を見たことがありますが、すごく感動しました。そこまでして子どもを勉強させたいと思う親がいる一方で、村に学校があっても行かせない親もいる。両極端なんです。

――― 中学からにするのはなぜですか？

田舎の小学校は卒業できても中身がほとんどないんです。少数民族の子どもは言葉の問題、先生の問題もあってちゃんとした教育を受けていません。それらは、中学校からならまだ取り戻せる。もう一度小学校教育から全部やろうと思っています。

ラオスの公立学校は結局、普通の子どもでさえも先生の目が行き届かない。だから今ラオスで流行っているのは少人数でみっちり勉強を教えてくれる私立学校です。公立が潰れる時代なんです。せっかくNGOや日本政府がODAで立派な公立校を作ってもつぶれることがあるそうです。

一方で私立学校にも二種類あって、安いところもあります。安い学校は授業料が安

い代わりに、一クラスに50～60人がいて、いっさい持ち込むのはだめ。お昼も学校内で買って食べ、ノートも学校で買って使いなさいという感じです。授業料はとらないけど、ほかで儲ける。学生が1,000人いれば、毎日1,000人のお客さんが「レストラン」に来てくれるようなものですから、そんないいお店は他にありませんよね。

――― 今後はこの中学校の支援も日本で呼びかけていくわけですね。

これから中学校の校舎も造りたいが、中学生を受け入れるためには、寮がなければ、地方からのこどもは受け入れられませんので、校舎や寮の建設資金の寄付を広く色々な方々に呼びかけたいのです。この建設資金は、一口3,000円です。

しかし、少数民族の中学生を学校に行かせ、生活をさせるのに、少なくとも月1～1.5万円くらいの学費と生活費が必要になると思います。ですから、私の趣旨に賛同して頂き、一人のこどもを支援するのは、本当に自分の子どもを育てるつもりで、受けていただける方に支援していただければと思っています。

中には「もう私立の学校はたくさんあるから、今更やってもしょうがない」と言われることもあります。でも私は違う学校にする。自分の土地なので建設費さえあれば徐々にやっていけると思っています。

支援については英語でも発信できるようにすれば海外からも寄付が集まるのではないかなと期待しています。学校の建設を早くしたいが、お金を借りて、造るのは、返済があるので大変です。実際、運営費を出しながら返済していくのは本当に大変です。本当なら私もラオスに住んで学校で教えたい、子どもたちと接したい、先生も育てたい。でも借金があるうちは日本で働かなければなりません。いつまで働けるかわからないので、それはすごく不安です。

――― 今振り返ってみて日本に留学していかがでしたか。

私はもともとフランスに留学したいと思っていたんです。でもフランスに行っていたら、私はラオスのことは考えないで自分の幸せだけを考えて生きていたと思います。日本に来たから素晴らしい人たちと巡り合って刺激を受けて、支援していたいたおかげで、今の活動ができていると思います。他の国にいるラオス人の多くは反政府活動をやった人もいますし、一人でラオスのためにやりたいと思っても村八分にされて大変だったと思います。日本でも、私のことを共産主義者だと言う人もいます。でもこれは「ナショナリズム」なんです。私は自分の国の人々のためにできることをやる。それが私の人生なんです。

（終）

特定非営利活動法人ラオスのこども
住所：東京都大田区南馬込6-29-12, ミキハイツ303
Tel/Fax：03-3755-1603
E-mail：deknoylao@yahoo.co.jp
URL http://homepage2.nifty.com/aspbtokyo/index.htm

一般社団法人 日本百賢アジア研究院 創立記念レセプションが開催される

アジア文化会館内に事務所を設置した一般財団法人日本百賢アジア研究院（渡辺喜宏理事長）の創立記念レセプションが2014年11月25日、国際文化会館にて大学、支援企業等関係者が参加し開催されました。ここに香港からレセプションに参加された百賢アジア研究院名誉会長の曹其鏞＝ロナルド・チャオ氏のスピーチをご紹介します。

ご来賓、友人の皆様、 本日は日本百賢アジア研究院（Bai Xian Asia Institute Japan /BXAIJ）の創立記念レセプションにお越しいただき、誠にありがとうございます。

我々は、およそ5年前に、アジアの若者同士、特に中国と日本の学生間の交流を促進するという目的でこのプロジェクトをはじめました。野心的な目標ではありますが、将来の指導者となるアジアの若者たちの間のよりよい相互理解と友情を深めることによってこそ、よりよいアジアまた世界が築けると考えています。百賢アジア研究院を支援する日本百賢アジア研究院の設立により、我々のプロジェクトのための基礎づくりはほぼ完成したと言えます。

先ほどのビデオにてご覧いただいた通り、現在、我々の「アジア次世代指導者奨学金プログラム」(Asian Future Leaders Scholarship Program/AFLSP）のもとで、日本、韓国、中国本土、香港及び台湾からの、6校のアンカー大学及び9校の参加大学の間で提携が成立しています。2015年4月までに、65名のAFLSP奨学生のほとんどが、特別に設立された寮に入り、地元の学生や他のアジアの国々の学生と共に住み共に学ぶ生活をはじめます。我々は、このような環境の下であれば、異なる文化を超えて絆を築けることを確信しております。

曹其鏞氏

文化の綾を十分に理解するには、現地の言葉に熟達することが基本的な、また必要な手段です。我々、百賢アジア研究院が達成したいと念じるもう一つの目標は、AFLSP奨学生が、地元の学生の奨学生の国の言葉の学習を手伝いつつ、受け入れ国の言葉に堪能になることです。それではこの信念を実証するた

めにもここからのスピーチは日本語にて続けたいと思います。

個人間の関係であっても、国同士の関係であっても、最後は相互利益が基本になると私は考えています。従って、今の中日関係は大変不正常ではありますが、この状態が永続するとは思いません。どんな角度から見ても、中国と日本は世界の第2、第3の経済規模を誇り、相互補完性が強く、国益に基づき二国間関係を強めれば、1＋1＝3になる可能性は明白であると思っています。

皆様方の温かいご支援のもとに、日本百賢アジア研究院が設立されました。本日の創立記念レセプションは我々のプロジェクトにとって、極めて重要な一里塚であります。

この度、日本政府より「旭日中綬章」を授与されました。この叙勲を大変光栄に思い感謝の念で一杯ですが、最も重要なことは、私どものこれまでの努力が日本政府により正式に認知されたことだと思います。そういう意味で、叙勲を私はチームの代表として喜んでお受けしたいと思います。今後とも、皆様ともども、アジア各国の相互理解促進のため最善を尽くしたいと思いますので、引き続きご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。それではここで皆様のご健勝と、日本百賢アジア研究院の発展を祈って、杯をあげ乾杯のご唱和をお願いいたします。

乾杯！

どうもありがとうございました。

ABK関係者　三氏が旭日章を受章

2014年秋の叙勲で日本政府から次のABK同窓生の三氏が旭日章を授与されました。

■**曹其鏞（75）**百賢教育基金創設者兼会長（東京大学・工学部機械工学卒）　旭日中綬賞

■ **Dr. Aung Kyaw（アウン・チョウ）（83）**元ミャンマー日本留学生協会会長（東京大学医学部大学院卒）旭日小綬賞

■ **Myint Wai（ミン・ウェイ）（75）**前ミャンマー日本留学生協会会長（東京工業大学・機械工学卒）旭日小綬賞

2014年12月9日、ミャンマーの日本大使館大使公邸で開催されたアウン・チョウさん、ミン・ウェイさんの叙勲授章式に出席された佐藤正文さん（元AOTS（現HIDA）職員）からお写真が送られてきましたので掲載させていただきます。佐藤さんのお話では、日本政府からのミャンマー国民に対する叙勲は43年ぶりだとのことで、その時の話によれば、43年前に受章したのは、独立運動家のAung San将軍と、Ba Mawさんとのことです。

11 月 25 日東京大手町 工業倶楽部で開かれた祝賀会にて
曹其鏞氏（前列左から５人目）と関係者のみなさん

12 月９日ミャンマー日本大使公邸で行われた叙勲授与式にて
アウン・チョウ氏（左）とミン・ウェイ氏（右）。右から５人目佐藤氏

ご祝辞

希望のあるところに種を蒔く

公益財団法人 アジア学生文化協会
理事長　小木曽　友

皆様今晩は。私は公益財団法人 アジア学生文化協会の小木曽と申しますが、留学生の曹其鏞さんが、当時住んでおられたアジア文化会館に、このたび設立された日本百賢アジア研究院（渡辺喜宏理事長）の事務所が入られることになりましたので、そのような諸々のご縁から、私にご挨拶のご指名をいただいたものと存じます。

私は1960年に開館したアジア文化会館（ＡＢＫ、東京都文京区）に日本人学生の一人として入館しましたが、そこに曹其鏞さんがおられました。曹さんは、当時東京大学工学部機械工学科の学生でしたが、その頃の曹さんも今と変らない穏やかで童顔の好青年でした。

当時のアジア文化会館では毎日様々な日本人、アジア・アフリカ・ラテンアメリカの留学生・技術研修生が生活し、学び、仕事をしていました。創立者の穂積五一先生は、当時の日本にはアジア留学生が心安らかに住むことできる宿舎がないことを憂いて、政府の援助に頼ることなく、全く民間の力でアジア文化会館を建設したのですが、先生は毎朝会館にやってくると黙ってゴミを拾って歩かれました。当時、アジア文化会館には何十か国もの人がいて、それこそ言葉も違う、民族も文化も宗教も風俗習慣も全く違う同士の共同生活ですから、それぞれの国のいろんな文化を何かで統一しようと思ってもできないわけですね。そのために、会館の運営の基本は、清潔にしてきちんとするほかはないというのが先生の基本方針だったのです。これはアジア文化会館の母体となった新星学寮、戦前から穂積先生が主宰する学生寮ですが、その運営は先生の若い頃の禅寺での経験から、寮生自身が自炊・清掃を行う自主的な寮でした。その母体の上に生まれた会館ですので、それを応用して、まずごみを拾えということをおっしゃったんだと思います。

因みに、穂積先生の奥様、文子夫人は真珠王御木本幸吉翁の孫であり、戦前は、上野音楽学校出身の新進気鋭のピアニストでしたが、縁あって、終戦後、穂積先生と大恋愛の末結婚され、職に就かず社会運動に奔走する穂積先生を、ピアノの出稽古で支えたという話は有名です。また、不思議なご縁ですが、日本百賢アジア研究院の理事で、先ほど挨拶をされた麻生泰社長のご母堂、麻生和子様とは親友と言えるほどの親しい間柄であったと伺っています。

それから、先ほどスピーチをされた堀幸

夫先生とアジア文化会館、そして曹其鏞さんとの間にも、深い因縁があります。まず、堀先生は東大工学部機械工学科で曹さんの指導教官であられました。そして、1957年に設立されたアジア学生文化協会の当初からの理事でした。曹さんは大学とアジア文化会館の両方で堀先生のご指導を受けていたということになります。それ以来今日まで50年間、アジア文化会館は堀先生のご指導をいただいてきました。現在87歳になられたとのことですが、今日、この曹さんの受勲祝賀会に立ち会われ、スピーチをされたということに不思議な因縁を感じます。

また、これも不思議なご縁ですが、今日の昼間、オープニング・セレモニーの行われた国際文化会館の創立者・松本重治先生は、穂積先生とは大の親友であられました。国際文化会館は欧米の知識人との交流の場、アジア文化会館はアジア留学生・技術研修生の交流の拠点として並び称されたものでした。

当時のアジア文化会館には日本を含むアジア各国から理想に燃えた元気のいい若い留学生が集っていました。曹其鏞さんもその一人でしたが、50年後の今振りかえってみますと、その錚々たる存在に改めて驚かされます。

例えば、日本人では、今日の昼間のオープニングセレモニーに出席された杉浦正健元法務大臣です。杉浦さんは、東大経済学部卒業後大企業に就職していたのですが、穂積先生がアジア文化会館の建設運動に乗

り出したと聞いて、矢も楯もたまらず、会社を辞めて馳せ参じたのでした。アジア文化会館の完成と同時に会館に住み込み留学生たちと寝食を共にしました。杉浦さんや曹さんなどを交え、在館生は、よく夜に酒盛りをやりましたが、曹さんが部屋からもってくるお酒は高級ブランデーなどが多かった、と先日も思い出話を語っておられました。

それから、今日この会に出席しておられる久保哲也さんも日本人学生の一人でした。久保さんは東大機械工学科で曹さんの同級生で、後に全日空の取締役になられた方ですが、卒業以来今日まで、曹さんが来日される度に必ず一緒に食事をされるなど、その友情はずっと続いています。それでは、曹さんと一緒にアジア文化会館で生活していた留学生にはどんな人がいたでしょうか。

まず、ビルマ（現ミャンマー）のアウン・チョウさんです。アウン・チョウさんは、曹さんと同様この度叙勲されました。アウン・チョウさんは、東大医学部で脳外科を学んで帰国した後は、国立ラングーン病院

の脳外科部長として活躍されるともに、元日本留学生協会会長として長年にわたり日本との交流に尽力された功績をたたえられて叙勲を受けられたものです。

それから、東大医学部を出られたお医者さんで、後に日本の小説や映画のタイ語への翻訳など日本との文化交流に尽くされた功績で、戦後の元タイ留学生としては初の叙勲者となられた方。それから、８年前バンコクに、元日本留学生が主体となって泰日工業大学という大学が設立・開学されましたが、その母体となったＴＰＡ（タイ日経済技術振興協会）の第３代会長を務めたタイの留学生も曹さんと同時期にＡＢＫで生活した留学生でした。その他、後にベトナム国立工業大学（現国家大学ホーチミン校ホーチミン工業大学）学長を務めたベトナム留学生、ブラジル・サンパウロ大学教授となられ、ブラジル初の南極学術探検隊長を務めたベトナム留学生もアジア文化会館で曹さんの同僚でした。また、東大大学院で稲作を研究されていたイラクの留学生は、厳格なイスラム教徒で在日イスラム教徒のリーダー格の存在でしたが、帰国後はサウディアラビア大学の教授になられ、後に、日本イスラムセンター長として日本に戻ってこられました。その在任中の2004年、イラクで起こった日本人人質事件では拘束された３人の日本人の釈放に多大な尽力をされましたが、そのことを知る日本人はほとんどおりません。また、当時、アジア学生文化協会が定期的に行った北海道見学旅行に曹さんと共に参加した台湾留学生の劉彩品さんは、今でも曹さんの親しい友人の一人ですが、東大大学院で天文学を学んだ後、同じく天文学者の日本人の夫君とともに南京の紫金山天文台教授として長く務められ、定年退職後は日本に住居を移し、現在、中日韓台４か国の天文学者の協力によりアジア天文台を中国につくろうと活躍しておられます。

このように、当時のアジア文化会館には、後に世界で活躍することになるアジアの錚々たる人材が集まっていました。もちろん、曹さんが、後に今日のような大実業家になられるであろうとは当時の日本人も留学生たちの誰も知る由もなく、曹さんは、そうした錚々たる人々と「俺、お前」の遠慮のない関係で同じ釜の飯を食い、自由闊達に交流する中で、揉まれ鍛えられて人間的に成長されたのだと思います。

曹さんのお話の中に度々出てくるアジア文化会館というのはそういうところでした。曹さんは、その時に結んだ友情をその後50年間大切に育んで今日まで及んでいるわけです。思い出はまだまだ尽きませんが、長くなりますので、最後に曹さんの言葉をご紹介して結びに代えたいと存じます。

曹さんの言葉（５月に放送されたＮＨＫテレビから）
「私は希望のあるところに種をまく」

ご清聴ありがとうございました。

留学生が紹介する母国のレシピ

留学生キッチン

② 生春巻き

（ベトナム風生春巻き）

講師：グエン テゥー ガンさん

★材料

ライスペーパー（直径16ｃｍ）10枚、ブン（フォー用乾麺;米粉）100ｇ、えび（中）10本、豚肉ブロック200ｇ、卵２個、レタス1/２玉、ニラ５～7本、人参（中）1/2本、塩 少々、酢 少々

＜つけ汁＞

水　90cc、砂糖　大2、ヌクマム（ナンプラー）　大5、酢（レモンがあればレモン汁）大1、にんにく　３片、唐辛子２本

① 鍋に豚肉のブロックが浸る位の水を入れ、強火で煮立て、塩少々加え、煮立ったら火を弱めさらにゆでる。時々肉に箸（or 竹串）を刺し、肉汁が出なくなったら鍋から取出し、冷ます。肉は３～５ミリほどの厚さに切り、更に５ミリ位の短冊切りにして、皿に移す。

② ブン（フォー）をゆでる。鍋にブンが浸る位の分量の水を沸騰させ、ブンを加え、５分ほど茹でる。ブンが柔らかければブンを水に移し、１～２回水を変え、皿に移す。

③えび10本は殻付のまま楊枝等で背腸を抜いておく。鍋に少量の水、塩少々、酢少々を加え一煮立ちさせたところに背腸を抜いたえびを入れ５分程茹でる。茹でたえびは冷水にとり、皮を剥き皿に移す。更に、えびは身に沿って縦に半分に切り分け皿に移す。＊酢を加えることによりえびの赤みがより鮮やかになる。

④ 人参は、薄く短冊切り（5㎝×5㎜）にしておく。鍋に少量のお湯を沸かし、切った人参を入れ3分程ゆで、お皿に移す。

⑤ 卵2個をお椀に割り入れ塩少々を入れ、箸でよくかき混ぜて置く。フライパンを温め、油を少々ひいたところへ、卵を玉杓子ですくい薄く引きのばし、強火で素早く火を通し、焦げ目のつかないうちに皿に移す。卵は2～3回に分けて焼く。出来上がった薄焼き卵は3～5㎜の細長い短冊切りにして皿に移す。

⑥ レタスは水できれいに洗い、ライスペーパーの中に入れやすいよう小分けにして皿に移しておく。

⑦ にらは、水で洗い、半分に切り分け、皿に移す。

⑧ ライスペーパーは、包む直前に皿に入れた水に通し、まな板、平らな皿等巻きやすいところに移し、皮が柔らかくなったら、①～⑦をレタス、プン、人参、卵、肉の順に置き、一巻きし、更に、えびを巻いた時きれいに見えるよう置き、最後に長いにらを加えて巻いて完成。大皿に盛りつける。

⑨ 唐辛子２本は小口切りに、にんにくはみじん切りにしておく。

⑩ たれは、水90ccに砂糖大２を加え、かき混ぜて溶かす。更にヌクマム大５、酢大１を入れ混ぜ合わせ、たれのベースを作る。ここに、⑨の唐辛子とにんにくを加え完成。生春巻きにつけていただく。＊たれは、レモンやライムがあればさらにおいしく仕上がります。

きれいに盛りつけて出来上がりです！

講師のガンさんに協力してくれたベトナム人寮（千石寮）の仲間たち。（左から）ニャットさん、ターンさん、ウィーさん、グェンさん、ガンさん、フォンさん、タオさん

私の意見
私の体験

橋を渡ったところにあったもの

周 媛（Ms. ZHOU YUAN）～中国・上海

東京医科歯科大学大学院　医歯学総合研究科　う蝕制御学専攻（博士２年）

●歯科医師から留学生へ

私は上海の同済大学の歯学部を卒業後、現地のクリニックに２年半ほど勤務した後、2011年に日本に留学しました。

私のクリニックは国営でとても安定した職場と言えましたが、ある時そこで定年まで勤め上げた先輩の姿を見て、自分は決まった人生を歩むのではなく、違う職場も経験したい、外国にも出てみたい、もっとチャレンジしたいと思うようになったんです。

また、仕事をしているうちに全てのことを上手にこなすことはできない思ったのも進学をしようと思った理由の一つです。歯科にはインプラントや補綴、抜歯、お年寄りの治療など、数多くの技術がありますが、その全てを上手にこなすのはとても難しい。それなら一つのことを深く勉強してその分野のエキスパートになりたいと思ったんです。私は歯を抜かずにいかに治療をするか、歯の保存について興味があったので、そこをもっと学びたいと思いました。

留学先を日本に決めたのは、大学時代の尊敬する恩師の何人かに日本への留学経験があったからです。

私の研究テーマはSSOCT（波長走査光干渉断層画像診断法）という日本発のエックス線に代わる新しい画像診断技術を利用した、う蝕に関する研究です。このSSOCTはレントゲンで使うエックス線よりも人体に安全で精密な画像を撮れるので、虫歯の微小な変化がよくわかります。私はこの機械を使って二次う蝕、虫歯を削った後に詰める材料の違いによる、う蝕進行の差異について実験、研究をしています。

また、私の場合は基礎研究ですから、この二次う蝕の状態をどのように作るのか、そのための細菌を培養しなければならず、この細菌培養が難しい部分でもあります。

大学の実験環境はとてもいいですね。教授は魅力的ですし設備が豊富でとても満足しています。

●日本での生活と思うこと

日本では学費と生活費は全

忘年会で研究室の仲間たちと

研究室は大家族のよう

て自分で賄っていますから、留学生活での問題はこの部分です。ただ私が通う東京医科歯科大学は国立大学なので学費が安いのと、学費免除の制度もあります。また奨学金も多くの種類を選べますから、その点では恵まれていると思います。私も学費免除を頂いていて、実はこれまで一度も学費を払ったことはないんです（笑）。

生活費は牛丼屋と居酒屋のアルバイトで賄っています。同じ研究室の日本人はクリニックなどでドクターとして働けますが、私は日本の医師免許を持っていないのでそれはできません。ですから研究では頭を、アルバイトでは身体を使っています。もっと研究に割ける時間が増えればいいなと思うことはありますが、これは仕方がないですね。アルバイトは日本人とのコミュニケーションを上達させるための良い経験だと思っています。２年生になってからは奨学金ももらえることになったので、そのアルバイトも最低限ですむようになりました。

東京に暮らしていて気持ちがいいことは日本人の丁寧な態度やルールを守る姿勢、どんな仕事でも真面目に取り組んでいる姿に触れられることです。給料の安い高いに関わらず一生懸命にやっている、自分の仕事を愛しているように感じます。それは中国人には足りない部分ですね。中国人はいつも楽にできる道を探していますから。

一方で上海は生まれ故郷ですから自分にとって楽な場所です。それに東京の人は冷たく感じますが上海人は熱い（笑）。例えば東京では誰かが荷物を落としたり、倒れたりしても日本人は自分とは全然関係ないという態度をとりますが、上海では必ずみんなが声をかけます。人々のつながりが濃いんだと思います。

こうしたことは海外で暮らさなければわからないことですね。ですから多くの後輩に言いたいのは、できれば留学したほうがいいということです。自分の国を離れて他の国で暮らす経験は素晴らしいものです。旅行とは違い長い期間暮らすことで、そこで暮らす人の考え方、生活環境、宗教などのことが分かり、自分の視野が大きく広がります。

飛行機で日本に来た時の気持ちは今も覚えています。仕事も、家族も友達も全て捨てて日本に来た。だから上海から日本に来る時はとても不安でした。日本語学校で日本語を学んでいる時も、何のために日本に来たのか何度も自分に問いました。未来はどうなるのか全然わからない。日本語学校も途中の橋でありこの

夏合宿で千葉の海へ

橋を渡ったところに何があるのかわからない。

そんな時、私は一つの言葉を書き、部屋に貼りました。それは「Impossible」という言葉です。「不可能」という意味ですが、アポストロフィーを入れると「I'm possible ＝私にはできる」、という意味になります。自分への励ましの言葉ですね。その言葉を胸に大学院受験までがんばりました。

そして橋を渡って、自分が望んだ通りの姿になっている。今は卒業できるまで、とにかくがんばるだけだと思っています。

●研究者への道

私は大学時代の恩師の話を今も覚えています。それは歯科医になるのと研究者になるのとどちらが社会に与える影響が大きいかということです。歯科医になると患者さんの歯を治療でき患者さんの生活の質を高めることが出来ます。もし歯学の研究者になると何を変えられるのか？　歯科医を変えることができるんです。世界の歯科医を変えることが出来れば何万倍の患者さんの生活の質を高めることが出来ます。だから研究者になることは歯科医になることより、もっと大きな影響を社会に与えることが出来ると思っています。でも研究者になるためには経済的な安定をどうするか考える必要があります。歯科医のように安定した収入は望めませんから。

大学院の先輩で10年日本で研究していたイギリス人がいますが、彼は来年ワシントン大学の先生になります。まだ30代ですが、とても優秀な方です。彼のように日本をはじめ世界のどこかで研究者を続けながらたくさんの後輩の面倒を見る。そうなることが私の理想です。

研究の道はとても長いです。結果が見えるまで何年もかかる。そして何年かけても理想的な結果が出るのかはわからない。だから研究を続けるためには情熱が必要なんです。

日本に留学して、今まで大部分うまく進んできたと思います。先生は品格も教育も素晴らしい。本当に良い理想的な研究室に入れたと思っています。これは学生にとってとても大切なことですね。本当にラッキーでした。

中国では大学の時は勉強だけ、クリニックでは仕事だけでした。今は毎日たくさんのことをしていろいろ考えて過ごしています。忙しくて毎日があっという間ですが、今は素直に日本に留学して本当に良かったと言えますね。

バンコクの泰日工業大学で活躍するスタッフ＆先生によるリレーエッセイ

泰日工業大学（TNI）奮闘記

⑨ 卒業式の先にあるものは・・・

水谷 光一

11月9日、快晴で暑かったこの日、黒の詰襟に白のレースのガウンに身を包んだＴＮＩ卒業生にたいして学位授与が行われた。

TNIの2013年度卒業生の学位授与式計653名、内学部生576人、大学院生77人であった。

4年前に入学した学生が988人だったことを考えると、ＴＮＩを修了するのは簡単なことではないことが分かる。

卒業生のうち、11月の段階で就職した者が436名、進学が89名、進路考え中、その他は51名だった。

一般論で言っても、タイの学生が就職を意識し始めるのは卒業試験が終わるか、その直前ではないかと思う。第一それまで宿題、試験に追われており、授業は朝8時から午後4時までびっしり入っており、しかも4年生の前期（場合によっては後期）はずっとインターンシップであり、就職のことなんて考えている暇が無いと言った方が正しい。

今日（2014/12/17）日本の大手自動車部品メーカーＤ社の入社説明会と一次筆記試験があった。ＴＮＩとつながりが強い日系企業は大学まで来て説明会を行い、その場で第一次筆記試験をしてしまう。来年卒業を控えていて、日本であれば就職が決まっているような時期だが、参加したのは50人もいなかった。

Ｄ社は日本では就職したい企業の上位に入ってくるような有名企業だから信じられない光景だ。それだけタイの学生は勉強にまじめで、卒業が決まったその日から就職のことを考える、というそんな感じだと思う。

そのような（日本から見たら）のんびりした就職活動を経て就職した学生を訪ねたことがあるが、１年もするとすっかり顔つきが学生から社会人に変わっているから不思議である。

日本人社長に気に入られて将来の幹部候補生として活躍している学生もいる。経営・日本語学科出身で、技術営業をしている卒業生にも会った。実は、経営学部学生の中にも高校で理科系進学コースだった学生がけっこういて、うまく日本人社長が学生の資質を把握して特徴を生かした人材育成を行っており、本人も大好きな日本語と自分の得意分野を生かせ

▲2014年11月9日の卒業式の様子。白のレースのガウンが印象的

▼日本のNEC我孫子工場に就職したコンピュータ工学科出身の2名「今年はすごく寒くて死にそう」

◀静岡からタイに進出した日系企業は経営学部から2名を幹部候補生として採用した。今では日本人社長（中央）の重要な片腕

て小さな会社ながら有意義な仕事に就いたと実感しているようだった。（写真の静岡から進出した会社）

実際就職先を訪れて、日本人・タイ人上司や学生自身と話すと、大学で見ていた姿とはまったく別の面が見えてくる。大学の4年間で培った人間関係、経験、学問知識を生かして、数年したらびっくりするような大物になってＴＮＩを再訪してほしい。

水谷光一（みずたにこういち）　学長室専任講師　1996-1999 ＴＰＡ勤務。1999-2005 ＡＢＫ勤務。2007年から現職。

泰日工業大学（TNI）の学長が交代

この12月8日付けでTNIの学長がクリサダー・ヴィサワティーラノン初代学長から、バンディット・ローッアラヤノン氏に交代となりました。バンディット氏は1968～1978年まで、日本政府奨学生として来日、東京工業大学にて1973年に工学士、1975年工学修士、1978年工学博士を電気・電子の分野で取得しました。1978-1991年はチュラローンコン大学工学部の教員として教壇に立ち、1991～1999年までは通信大手ジャスミングループで経営者としての手腕を振るい、2001～2009年まではTPA事務局長、2009～2014年までTNI副学長として活躍されました。

知友会通信
CHIYU KAI TSUSHIN

奨学金情報

■ 日本国際教育支援協会冠奨学金事業 JTアジア奨学金

●**対象**：①アジアの国（地域）籍（※）を有し、わが国で修学または研究する私費外国人留学生 ②わが国の大学の大学院修士課程または博士課程に正規生として2015年４月１日時点で在籍している者、もしくは2015年４月から入学を予定している者（専攻分野は限定しない）

※「わが国の大学」とは奨学金提供者と協議の上選定した指定校制とする。

③2015年４月以降、他の奨学金の給付を受けない者　④真に経済的援助を必要とする者 ⑤品行方正で学業成績が優秀な者　⑥2015年４月１日現在で、満年齢35歳未満の者 ⑦国際理解と親善に関心を持ち、貢献を期する者で、奨学金提供者が開催する交流行事（年３回予定）に積極的に参加できる者　⑧日本語でのコミュニケーションが可能な者　⑨在籍大学の長の推薦を受けることができる者

（※）アジア地域諸国の具体的範囲は、パキスタン以東（インド、インドネシア、カンボジア、シンガポール、スリランカ、タイ、韓国、中国（香港・マカオを含む）、台湾、ネパール、パキスタン、バングラデシュ、東ティモール、ブータン、フィリピン、ブルネイ、ベトナム、マレーシア、ミャンマー、モルディブ、モンゴル、ラオス）とする。

●**給付金額**：150,000円

●**給付期間**：2015年４月より2017年３月までの最長２年間（最短１年間）2016年度に、引き続き２年目の給付を希望する場合は、別途所定の手続を必要とする。

●**募集人数**：10名程度

●**応募方法**：所定の様式による願書を、在籍（入学）する大学を通じて提出する

●**応募期間**：１月９日（金）まで（必着）

●**問合せ先**：公益財団法人 日本国際教育支援協会国際交流課奨学係

〒153-8503 東京都目黒区駒場4-5-29

☎03-5454-5274

FAX 03-5454-5242

E-mail:ix@jees.or.jp

http://www.jees.or.jp/sc-scholarship/index.htm

■ 公益財団法人 佐藤陽国際奨学財団　私費留学奨学生

●**対象**：①バングラデシュ、ブータン、ブルネイ、カンボジア、インド、インドネシア、ラオス、マレーシア、モルディブ、ミャンマー、ネパール、パキスタン、フィリピン、シンガポール、スリランカ、タイ、東ティモール、ベトナムから来日し、文部科学省所轄の大学の学部または大学院に在籍する当該国の国籍を有する私費留学生　②国際理解と親善に関心を持ち、財団の交流会に必ず出席できる者　③他の奨学支援団体等から奨学金に類する金品を受給していない者。　④在留資格「留学：college student」を有する者　⑤日本で就業している親がいない者　⑥「博士」の学位を取得していない者　⑦2015年４月の新１年生と新編入生である者　⑧勉学・研究に支障のない日本語能力を有する者　⑨当財団の奨学生を終了後、同窓生として交流活動に積極的に協力できる者

●**給付金額**：（学部生）月額12万円、（大学院生）月額18万円（この他に学会出席補助金制度あり）

●**給付期間**：2015年４月から2017年３月までの２年間（博士後期課程採用者については、課程修了までの期間。ただし、支給期間中、定期的に選考委員会による中間審査を行い、標準年限内に博士号の取得が困難と判断された場合は、支給を停止することがある。）

●**募集人数**：若干名

●**応募方法**：在籍する大学の留学生課を通して財団宛に郵送にて提出すること。

●**応募期間**：2015年１月16日（金）～１月20日（火）必着

●**主催団体**：公益財団法人佐藤陽国際奨学財団

〒153-0064 東京都目黒区下目黒1-7-1

☎ 03-5487-2775

URL　http://www.sisf.or.jp

■ 岡本国際奨学交流財団私費外国人留学生奨学助成

●**対象**：2015(平成27)年４月１日時点で①千葉県内の大学に在籍するか、千葉県内に居住し隣接都県の大学に通う、私費外国人留学生。②学部４年生か大学院生。研究生の場合、４月に修士あるいは博士課程に進学が確定していれば応募できる。③他から学習奨励費以上の奨学助成を受けない（学習奨励費との併給不可）。④夫婦の片方が日本国費生、母国政府・機関派遣生、日本国内で就職している場合は応募できない。⑤当財団の毎月の例会に毎回必ず出席できること。

●**給付金額（月額）**：８万円（毎月の例会で支給）

●**給付期間**：2015年４月から１年間

●**募集人数**：20名以内

●**応募方法**：応募書類を揃えて、団体事務所まで持参、または郵送

●**応募期間**：１月30日（金）17時必着

●**主催団体**：公益財団法人岡本国際奨学交流財団〒 263-0023 千葉市稲毛区緑町 1-19-11　http://www.osf-family.com/

■ 共立国際交流奨学財団 奨学金

●**対象**：アジア諸国の国籍を持つ私費留学生（大学院、大学・短期大学、専門学校に所属する学生）

※ 当財団選考基準では外務省が規定しているアジアの国を『アジア諸国』としており、該当国は以下の 21 カ国 +2 地域です。

大韓民国、中華人民共和国、台湾、香港、モンゴル、ベトナム、ラオス、カンボジア、タイ、ミャンマー、マレーシア、シンガポール、インドネシア、フィリピン、インド、スリランカ、パキスタン、バングラデシュ、ネパール、ブータン、東ティモール、ブルネイ、モルディブ

●**給付金額（月額）**：10 万円

●**給付期間**：2015 年４月から２年間

●**募集人数**：15 名

●**応募方法**：当財団奨学金対象校である学校を通して応募する

●**応募期間**：1 月 30 日（金）（消印有効）

●**主催団体**：一般財団法人　共立国際交流奨学財団〒 101-0021　東京都千代田区外神田 2-18-8（株式会社 共立メンテナンス内）

☎ 03-5295-0205

FAX：03-5295-0206

URL　http://www.kif-org.com/

■ 共立メンテナンス奨学基金 奨学金

●**対象**：アジア諸国（※）の国籍を持つ私費留学生（大学・短期大学、専門学校、日本語学校に所属する学生）

※ 該当国は以下の 21 カ国 +2 地域です。

大韓民国、中華人民共和国、台湾、香港、モンゴル、ベトナム、ラオス、カンボジア、タイ、ミャンマー、マレーシア、シンガポール、インドネシア、フィリピン、インド、スリランカ、パキスタン、バングラデシュ、ネパール、ブータン、東ティモール、ブルネイ、モルディブ

●**給付金額（月額）**：6万円

●**給付期間**：2015 年４月から 1 年間

●**募集人数**：35 名

●**応募方法**：当財団奨学金対象校である学校を通して応募する

●**応募期間**：1 月 30 日（金）（消印有効）

●**主催団体**：一般財団法人　共立国際交流奨学財団〒 101-0021　東京都千代田区外神田 2-18-8（株式会社 共立メンテナンス内）

TEL：03-5295-0205　FAX：03-5295-0206

■ 日本ガイシスカラシップ

●**対象**：①「留学」の在留資格を持ち、愛知県内の大学に正規の学部生、大学院修士もしくは博士課程生として在学する私費の留学生であること。②学資の支弁が困難と認められること。③財団の奨学金受給期間中は、日本政府奨学金（以下、国費）または他の団体の奨学金を受給しないこと。④奨学金受給が開始する年の４月１日現在の満年齢が 35 歳未満であること。⑤心身ともに健康であり品行方正で学業優秀であること。⑥国民健康保険に加入していること。⑦日本の社会と文化および国際交流に深い関心を持っていること。⑧財団の交流行事に参加できること。

●**給付金額**：月額 12 万円

●**給付期間**：最長２年間　＊ただし１年後に再選考（2 年以内に卒業する場合は最短修業年限）

●**採用人数**：20 名（新規と継続）

●**応募方法**：所定の応募書類一式を作成のうえ、在籍大学の留学生担当課へ提出し、大学長の推薦を受ける

●**募集締切り**：1 月 31 日

主催団体：一般財団法人日本ガイシ留学生基金

〒 467-8530 名古屋市瑞穂区須田町 2-56（日本ガイシ内）

URL　http://www.ngk.co.jp/csr/philanthropy/index.html

■ 日本国際教育支援協会冠奨学金事業 ユアサ留学生奨学金

●**対象**：①平成 27 年４月現在で、日本国内の大学（指定校）の修士・博士課程に正規生として在籍する私費外国人留学生　②在留資格が留学であること　③在籍大学の長の推薦を受けることができる者　④東アジアおよび東南アジアの諸国および地域の国籍を有する者　⑤本奨学金の支給期間中、他の奨学金の支給を受ける予定のない者　⑥留学の目的または計画が明確で、修学の効果が期待できる者　⑦経済的援助を必要とする者　⑧日本語による意思伝達が可能な者

●**給付金額**：月額 10 万円

●**給付期間**：平成 27 年４月より平成 28 年３月まで（ただし大学における在籍期間中に限る）

●**採用人数**：７名程度

●**応募方法**：所定の様式による願書を大学を通して提出する

●**募集締切り**：2 月 10 日（必着）

●**問合せ先**：公益財団法人日本国際教育支援協会 事業部 国際交流課　☎ 03-5454-5274

FAX 03-5454-5242 E-mail : ix@jees.or.jp

http://www.jees.or.jp/sc-scholarship/index.htm

イベント情報

第３４回 からいも交流・春　ホームステイ参加者募集

「からいも交流」は、ホームスティの約２週間、ホストファミリーの仕事を手伝ったり、地域の交流に参加したり、田舎生活をともにする中で、観光旅行では得られない、本当の相互理解や、生涯の友人を作る手助けをします。

●日程：A…2 週間プラン　2015 年（平成 27 年）3 月 7 日（土）～ 3 月 22 日（日）　B…1 週間プラン　2015 年（平成 27 年）3 月 7 日（土）～ 3 月 15 日（日）

●参加費：A…① ¥40,000（鹿児島集合、交通費を含まず）　② ¥50,000（大阪→鹿児島 or 鹿児島→大阪、片道フェリー料金を含む）　③ ¥60,000（大阪⇔鹿児島、往復フェリー料金を含む）　B…① ¥30,000（鹿児島集合、交通費を含まず）、② ¥40,000（大阪→鹿児島 or 鹿児島→大阪、片道フェリー料金を含む）　③ ¥50,000（大阪⇔鹿児島、往復フェリー料金を含む）

●ホームスティ先：鹿児島県・宮崎県の一般家庭

●応募資格：日本国内の大学・専門学校・日本語学校に在籍の留学生

●募集定員：80 名（先着順）

●応募締切：※ 申込方法等は主催者ホームページをご覧ください

●主催：NPO 法人からいも交流　〒 899-4501 鹿児島県霧島市福山町福山 5290-66

Tel. 0995-64-7751 FAX:0995-64-7755

Email: karaimo@po.synapse.ne.jp　　URL: http://www5.synapse.ne.jp/karaimo/

MEMBERS

〈会費とご寄附の報告〉

2014 年 10 月

特別会員

（1口）

日本シグマックス（株）新宿区

正会員

（2口）

石川 毅／優子　北区

（1口）

佐藤 和江　日野市

清水　恭子　練馬区

小野里 光博　文京区

中島 明彦／絢子　横須賀市

ご寄附

大越 英男　仙台市

酒井 杏郎　渋谷区

眞山 靜子　文京区

2014 年 11 月

正会員

（1口）

藤田 淑子　文京区

重野 幸子　臼杵市

山口 誠　吾妻郡

早乙女 和義／博子　品川区

福井 道子　豊橋市

宇戸 清治／マリ　八王子市

ご寄附

西本　梶　横浜市

齋藤 美知子　富里市

二村 美朝子　練馬区

皆様の暖かい御支援に感謝申上げます

ご入会とご寄付のお願い

当協会は、政府の補助金を受けていない純民間運営の公益法人ですので、財源に限りがあり、皆様方からお送りいただく会費、寄付金は、本協会の活動を支える貴重な財源となっています。何卒ご理解、ご協力をお願い致します。

協会のあらまし

名　称：公益財団法人アジア学生文化協会
ASIAN STUDENTS CULTURAL ASSOSIATION
(ASCA)

所在地：東京都文京区本駒込2丁目12番地13号

代表者：理事長　小木曽　友

設　立：1957年（昭和32年）9月18日
故穂積五一氏創設

目　的：日本とアジア諸国の青年学生が共同生活を通じて、人間的和合と学術、文化および経済の交流をはかることにより、アジアの親善と世界の平和に貢献することを目的とする。

◇主な事業◇

(1) 留学生宿舎の運営
(2) 留学生日本語コースの運営（進学希望者向けの日本語を中心とする教育）
(3) 留学生に対する情報提供支援
(4) アジア語学セミナー
(5) 帰国留学生のアジア文化会館同窓会、（社）日・タイ経済協力協会、ＡＢＫ留学生友の会との連携・協力

◇会費（年額）◇

正会員	1口	1万円
賛助会員	1口	5万円
特別会員	1口	10万円

会員には広報誌「アジアの友」が無料配布されます。また、広報誌購入だけを希望される方には、購読料年間３千円（学生２千円）でお送りしています。

当財団に対する寄附金は、所得税、一部自治体の個人住民税、相続税、及び法人税の税制上の優遇措置があります。

本誌で広告してみませんか。

団体・企業を問わず、編集部へご相談ください。

おかげさまで、当財団は2014年4月1日に公益財団法人に移行しました。これまでご支援いただきました皆様には大変ご迷惑をおかけしておりましたが、これにより会費並びに寄附金は税制上の優遇措置の対象となります。今後とも、皆様のご支援の下、これまでと同様留学生宿舎の運営、留学生への情報提供、同窓会活動等の活動を通じ、アジアの青年の育成と友好親善のために微力を尽くす所存です。引き続き皆様のご支援を賜りたくよろしくお願い申し上げます。

後記

今年は、元留学生の帰国後の自国での活躍が認められABK同窓生４氏が日本政府から旭日章を叙勲された。春の叙勲にタイのクリサダー・ヴィサワティーラノン氏（泰日工業大学初代学長）が、秋の叙勲で香港の曹其鏞氏(アジア次世代指導者奨学金プログラム他）、ミャンマーのアウン・チョウ氏とミン・ウェイ氏（ともにMyanmar Association of Japan Alumni=MAJA会長）の３名が受賞した。ABK創設者の穂積五一先生のお考えの通り、多くの元在館留学生の中から帰国後、各国で立派な社会的仕事に携わっている人を輩出しているのは決してただの偶然ではないだろう。（F）

今号でインタヴューのチャンタソンさんはABK在館中（1987-88）の学生時代からすでにラオスに絵本を送っていたように記憶している。その後の活躍は知る人ぞ知る地味な活動だ。最近facebookで、ラオスに念願の幼稚園が完成したと知って、久々に六本木で開催中の展示即売会に出かけ、彼女の長きに亘る活動についての話を伺ってきた。夢はまだまだ３合目、これから更に目指す頂上があるという。白いものが混じる髪は、時間の経過を告げるが、きらきらとした目の輝きは、学生時代のままだった。（F）

アジアの友　2014年12月号 - 2015年1月号

2014年12月20日発行（通刊第512号）
年間購読（送料共）3,000円（学生2,000円）　1部 500円（税込）

発行人　小木曽　友
編　集　アジアの友編集部
発行所　公益財団法人　アジア学生文化協会
東京都文京区本駒込2－12－13（〒113-8642）
電話番号：03-3946-4121　ファクシミリ：03-3946-7599
振替口座：00150-0-56754　E-mail：tomo@abk.or.jp
ホームページ：（http://www.abk.or.jp/）

published by ASIAN STUDENTS CULTURAL ASSOCIATION
(ASIA BUNKA KAIKAN)
2-12-13, Honkomagome, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-8642, JAPAN
☎+81-3-3946-4121 ㎠+81-3-3946-7599
Email : tomo@abk.or.jp
Home Page : http://www.abk.or.jp/

「アジアの友」の購読会員（年3,000円・学生2,000）にご入会下さい。振替用紙又は電話等にて。

Asia・Africa・Latin America・Japanese Students Dormitory

アジア文化会館（ABK） 入館学生特別募集

アジア文化会館は、公益財団法人アジア学生文化協会によって 1960 年に創設されました。アジア、アフリカ、ラテンアメリカからの留学生と日本人学生が、月例会（金曜日夜）等によって自治的共同生活を運営し、それを通じて人間形成と国を超えた友情育成に努めています。また、地域に開かれた『ABK 秋祭り』（10 月下旬開催予定、屋台・パフォーマンス他）等の行事も開催しています。この度、下記の通り入館学生の募集を行いますので、どうぞお申込み下さい。

1．申込資格　：　次の 4 項の全てに該当する方

a. アジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸国からの留学生及び日本人学生

b. 日本国内の大学、大学院、短期大学、専門学校に在籍する学生
（日本語別科の学生、研究生、科目等履修生、聴講生等を除く）

c. 共同生活の義務をお互いに果たし、自治の権利を発展させる生活に積極的に参加する意志がある学生

d．日本語でコミュニケーションができる学生。

2．募集人数　：　若干名

3．選考日程　：　申込締切　　2015 年 1 月 31 日（土）当日必着

説明会・面接　2 月 7 日（土）午後 1 時集合（時間厳守。開始前に施設見学あり。）

決定通知　　2 月 13 日（金）頃メールで通知予定。

※お電話での照会や、結果の理由説明等には応じかねますのでご了承ください。

4．申込方法　：　a．ホームページにアクセス⇒ http://www.abk.or.jp/accommodation/longstay.html

b．書式をダウンロードして必要事項を入力。

c．必要書類を kaikan@abk.or.jp 宛にメールで送信。

※郵送可。郵送の場合は下記の住所宛にお送りください。

5．必要書類　：　a．入館申込書（所定の書式）

b．入館自己紹介（所定の書式）

c．在学証明書又は入学許可書の写し（メールで送る場合は pdf または jpg などの画像ファイルでお送りください。原本を提出する場合は郵送してください。）

6．入 館 日　：　3 月下旬から 4 月上旬までに入館する（具体的な入館日は事前に打ち合せの上決定）

7．経　　費　：　**部屋代**　38,000 円／月（冷暖房、水道光熱費、インターネットを含む）。

入館料　70,000 円（返還しません）　**月例会費**　500 円／月

8．設　　備　：　[個室]　ベッド、机、椅子、室内照明、電話機（受信専用）、エアコン、クローゼット、本棚、インターネット LAN 配線

[共用]　自炊室、トイレ、洗面所、シャワー、コインランドリー、卓球場、WI-FI（ロビー、地下ホール）

※夜 12 時が門限です。実験等で例外的に遅れる場合は事前に連絡して下さい。

9．在館期限　：　原則として、入館時に在籍している教育機関の課程を修了するまで。（なお毎年度末に継続の可・不可を決める審査があります。毎年 4 月には在学証明書を提出してください。）

問合せ・送付先　：　〒113-8642　東京都文京区本駒込 2-12-13　アジア文化会館（ABK）
入館選考委員会　Tel. 03-3946-4121 Fax. 03-3946-7599
E-mail: kaikan@abk.or.jp
都営地下鉄三田線千石駅 A1 出口より徒歩 3 分